

5. ^{111}In トランスフェリンを用いて蛋白漏出を確認した表層拡大型早期胃癌の1例

中谷 尚登 成木 行彦 瓜田 純久
平野 盛久 大塚 幸雄 (東邦大・一内)

症例は43歳、女性。平成3年10月内視鏡にてIIC+IIIと診断された。軽度の低蛋白血症が認められ、 ^{111}In トランスフェリンを用いた蛋白漏出試験を施行した。72時間の蓄便中に8.06%/IDと健常人(Mean 0.48±0.26%)に比較し高度な蛋白漏出を示した。摘出標本において、病巣はIICの範囲が5.0×3.5cmであり、深達度はmの表層拡大型胃癌であった。粘膜下層に強度の線維化と炎症性浸潤を認め、組織型は印環細胞癌であった。われわれのこれまでの検討では、早期胃癌での消化管への蛋白漏出はほとんど健常人と差が認められなかった。しかし、本症例の蛋白漏出は早期胃癌であるが表層拡大型であり、腫瘍の面積が広いことが一因と考えられた。

6. AIDS患者に合併した日和見腫瘍における腫瘍スキヤンの有用性について

小須田 茂 鈴木 謙三(都立駒込病院・放)

AIDS患者またはHIV感染者で腫瘍合併が疑われ、ガリウムまたはタリウムスキヤンを施行しえた9症例を対象に腫瘍スキヤンの有用性について検討した。内訳は悪性リンパ腫3例、カポジ肉腫4例(2例は脳原発悪性リンパ腫合併)、肺腫瘍2例であった。

AIDS患者、HIV感染者において、ガリウムスキヤンは悪性リンパ腫の検出、病巣の拡がりの把握、経過観察に有用と思われた。カポジ肉腫にはガリウムが全く集積せず、タリウムが集積した。ガリウム、タリウムスキヤン併用はAIDS患者、HIV感染者に合併する腫瘍の検出、把握に有用であり、その集積分布パターンは日和見感染症との鑑別にも有用と思われた。

7. $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MAAの動注シンチグラフィが経過観察に有効であった乳児肝芽腫の1例

岡本 憲三 塩入 弘和 杉山 卓
(清瀬小児病院・放)
石田 治雄 (同・外)
石井 勝己 (北里大学・放)

生後6か月の女児で、肝芽腫の動注化学療法においてカテーテルの位置確認や腫瘍の形態の変化を見るために $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MAAを用いたシンチグラフィを1か月ごとに行ってみた。

シンチグラムでは、ピクセル数が1か月後で正面像877・側面像985、4か月後で正面像306・側面像356と腫瘍の縮小が見られ、体積比でも約5分の1になった。AFP値にも同様の変化があった。

この検査は、カテ先位置確認だけでなく治療の効果測定にも有効である。検査施行にあたっては小児でも安静を保つだけで、麻酔などが必要なく安全にできる検査である。

8. 塞栓術にて腎機能を保存しえた巨大腎動脈瘤の一例

浅野 晃司 町田 豊平 大石 幸彦
吉越富久夫 (慈恵医大・泌)
川上 憲司 守谷 悦男 (同・放)

症例は40歳、女性。めまい、高血圧にて近医受診。CTにて左腎腫瘍を指摘され、当科紹介となる。初診時、左側腹部に手拳大の腫瘍を触知、同部位に連続性雑音を聴取した。腹部CTにて左腎内側に血管と同程度に造影される腫瘍と、血管造影では動脈相にて、1本の流入動脈と、これに続く瘤がみられ、同時に1本の流出静脈と下大静脈が造影された。また、RIアンギオ、レノグラム、腎シンチ等の核医学検査では左腎血流の著明な増加、右腎血流の減少にともなう機能低下を認め、以上の検査結果より左腎動脈瘤と診断、瘤の形態を詳しく検索したのち、5～15mmの31ヶのsteel coilを用いて塞栓術を施行した。術後3か月の動脈造影にて再開通は認めておらず、核医学検査にて、左腎機能の温存、右腎血流動態の改善を確認した。腎動静脈瘤に対する塞栓術では瘤の形態の検索、塞栓物質の選択がきわめて重要であり、術前後の腎血流動態、腎機能の評価には核医学検査が必須と思われた。